

JIA長野県クラブ54

社団法人 日本建築家協会

2002. 5. 1

技術交流会



夫婦の寝室は住まいづくりに重要と話す藤原智美氏



◆学生卒業設計コンクールの審査会風景



ざ・いらい工法の家



副会長 関 邦 則

先に上梓した「信州の建築家とつくる家」を見ると、私たちの仲間の多くは木造住宅に強い関心をもっていることが示されています。私は鉄筋コンクリート住宅を掲載することが多いのですが、木造住宅にも関心があることをお断りして、以下に進めたいと思います。

私たち自身の関心もさることながら、木造住宅は社会全体の気運としてフォローウィンドを受けています。一口に木造と言っても様々な工法が割拠しています。工法そのものがシステム化・パッケージ化されて商品になっていることが多いようです。そうした状況ではありますが、私たちが最も愛用しているのは、昔から着実に職人の手によって受け継がれてきた在来工法と呼ばれている木造です。そもそも工法とは構造体の存在形式のことというのだと思いますが、その構造体が空間や造型を規定してしまうことが多い中で、私たちが在来工法を多用する最大の理由は、設計の自由度つまりイメージした空間をそのままに近いところで実現できるということにあるのだと思います。(もしかしたら、そういう工法でしか発想できなくなっているのかもしれません。)

大きな地震を経験して以来、建築基準法が改められた

り性能表示制度が導入されたりしているので、自由なはずの在来工法と言えども厳しい制約を加えられることになってしましました。しかし、建築家も職人もそんなことに屈してはいません。在来工法は、特定のメーカーなどによって囲いこまれておらず、例えて言えばパソコンのフリーウェア(使用料不要なアプリケーションソフト)のようなものです。使用権利も技法も自由であるということは、自分のイメージを実現しやすいばかりでなく、クライアントの要望や依頼にも応えやすいということです。このことは実はとても重要なことだと思います。なぜなら、それは家を買うのではなく、家をつくるということに直結しているからです。私たちは当たり前のよう我在来工法を用いて設計をしていますが、改めてその自由であることを認識すると、在来工法はクライアントの依頼や建築家の期待に応えやすい「ざ・いらい工法」と言い換えてもよいものなのだと思います。

一方で県産材の利用促進も強い社会要請になりつつあります。私たちは「家をつくる」というスタンスを保持するためにも、県産材の利用促進のためにも、在来工法に磨きをかけていかなければいけないと感じました。



JIAリフレッシュ
セミナーに参加して
甘利享一
甘利享一建築設計舎

3月3日から3日間に亘り熱海において、JIAリフレッシュセミナーが、日本建築家協会教育研修委員会の担当により開催された。3月3日の午後熱海駅に到着し、会場へ向かう道中桜の花が7~8分咲きに開花している。まだ、本土に桜前線が上陸していないのに温泉地の地熱が高い影響であろうか桜の花が迎えてくれた。

当日は叔父の一年忌の法事があり3時間程遅刻してからの到着であり、セミナー1の商品化住宅「ミサワのねらい」はディスカッションの詰めの状態であった。セミナーの内容を把握できないまま30分程で1日目は終了した。

2日目は朝9時より開催した。昨日は自己紹介がなかったとのことで日本各地より参加した25名と村尾会長を始め講師3名、教育研修委員7名の紹介があった。ちなみに研修委員の顔ぶれは横河健委員長、委員として木下庸子、国広ジョージ、椎名英三、古谷誠章、宮崎浩、六鹿正治の昨日後部席に座っていた人々である。セミナー2は建築家とメディア「彰国社何をめざしたか」、セミナー3は「新建築社がとりあげる建築とは」のテーマの基に講義があり、午後はグループ別に夕方6時30分までディスカッションが行われた。その中で新建築社の吉田社長（若干42才）は、これから新建築にとりあげる建築は、名の通っている建築家より地方の名もない新しい物づくりに挑戦している新人建築家を発掘し発表していく。また3月より中国向けに年4回の季刊誌として新建築を発刊することが決まっている。なぜ中国へ進出するかという理由の中で、中国で建築家の講演会等を開催すると日本の若者の聞いてやるかという風潮に対して、中国の若者は目を輝かせながら聞いている。これからは日本より中国に魅力を感じる。また新建築に載つてみたいかという話に触れ、ちなみに新建築に載つことがあるかの問い合わせに半数以上の人人が手を挙げ新建築に対する批判、論評が議題となつたが、最終的には全員が載れるものなら載つてみたいという結論に達した。締めの話の中で、現在の建築は、大手事務所は無論のこと、アトリエ事務所でも誰の設計か区別がつかない建築となってしまってきている。そうした状況に対して建築をワクワクさせながら新鮮に表現できる建築が今後数多く生まれることを期待したいという言葉を耳にし、3日目はまとめとグループリーダーによる発表という事で3日間のセミナーを終了した。自分の勉強不足と井の中の蛙であることを思い知らされて帰路についた。



「家族を『する』家」
藤原智美氏、文化講演会
赤羽吉人
(株)林魏建築設計事務所

当クラブ恒例の文化講演会も記念すべき第10回目、3月6日メルパルク長野に於いて講演会とパネルディスカッションの2本立て企画で開催された。

講師は芥川賞作家で住まいと家族に関する2冊の著書を出版されている藤原智美氏。著書と同じ「家族をする家」と題した同氏の基調講演は、多くの示唆に富んでいて大変興味深く傾聴した。

70年代までの住まいには仕事があり家族のコミュニケーションをとる必要などなかったが、80年代になると職、仕事、子育てが住まいから消えた結果、住まいの中に濃密な人間関係だけが残ってしまった。90年代には子供達の環境が変わり、子供が浮遊化した。携帯電話の普及で子供にとって子供部屋は必ずしも必需品ではなくなった。もし家族に問題が発生すれば、子供は簡単に家から出てしまう。夫婦間で情報処理がうまくできないと問題が起きる。そこに夫婦の寝室の重要性が生まれる。少なくとも子育ての間は夫婦は同じ寝室で眠り、そこを夫婦間のコミュニケーションの拠点にすべきである。以上が講演の主旨であった。

夫婦の寝室が中心となる家づくりが大切と訴える同氏の主張に多くの聴衆の方が頷きながら聴き入っていた。

後半のパネルディスカッションは、藤原氏の著書出版を担当した出版編集者の原孝氏をコーディネーターとし、主婦で出版編集者の寺島純子氏、当クラブの片倉隆幸氏をパネラーとして迎え、「夫婦寝室の別室化には反対」(原氏)をテーマとして始まった。テーマ自体に時代感覚があり、どんな論争が聴けるだろうかと内心わくわくして聴いていたが、残念ながら少々期待はずれであった。

原氏が、子供部屋の完全な個室化は不要とする片倉、寺島両氏の主張を引き出したところまでは頷けるが、それに対する藤原氏の「個室絶対必要論」で論争点は個室の必要性に留まってしまった。片倉氏は住まいの中心は家族の集う場所でありそこに対して個室も空間的に繋がっていても良いとの意味合いで主張されたと思うのだが、その辺りを斟酌することなく個室不要論として切り捨ててしまった為、「住まいの中心は居間か、夫婦寝室か」も素通りで、本来のテーマ「夫婦寝室別室化論」の是非論議に到達することなく終了したのは残念であった。

しかしながら企画の着眼点は斬新であり、今後も是非このようなスタイルの企画を続けてほしいと強く感じた。担当の事業委員会、パネラーの皆さんご苦労さまでした。



建築産業廃棄物

久保田 正 博
(有)みすゞ設計

今年は異常な早さで桜が開花しました。地球温暖化の心配をしながらテレビのニュースを見ていました。50年間の観測データからは、場所によっては過去に更に早い時があったとかで、地球環境はよく分からぬものです。これからも自然の美しい便りはいつまでも続いてほしいものです。

さて、こうした美しい自然風景の一方で、私達が関係している建設業界のゴミ問題は、これまで負の遺産として問題を残してきました。日本のゴミ総量の約70%といわれる建設関係の排出量は相当大きなものであり、その中の建築関連分の割合は分かりませんが、最近幾つかの処分場を視察してみると圧倒的に建築が多そうです。

環境問題を考えると、断熱材一つとっても従来のままの考えでは反省することが多いと感じています。設計事務所が例えISO14000シリーズを取得しなくとも、その思想の変換こそ必要になるところでしょうか。

建築行為には既存建物が有る無しに関わらず産業廃棄物が出る訳ですが、物によって処分方法が安定型、管理型、特別管理型に大別されています。処分先では、更にその方法が業者によって違った許可がされています。例えばプラスチック類については、ある業者は火力発電所や製鉄所の燃料チップにされ、別の業者は焼却処分であり、片や埋立処分です。木材については産廃の状態により焼却、バーク化、チップ化、またはチッパー処分に別れていて、更にチッパー処分は伐採丸太や梁柱などの状態により区分されて処分単価も変ってきます。タイルについては再生クラッシャーラン化と、埋立処分に別れています。こうした業者の都合によるバラバラな処分方法のやり方ではなく、これからは正しい廃材の成分分析と分別収集で、より一層再利用、再資源化に向けて統一された処分方法で進むべきでしょう。

最近の長野県では、新規埋立処分場が用地問題で中々先に進めない状態です。また、東信と中信では産廃業者が行政処分を受けました。更に5月から産廃処分方法の基準もより厳しくなるようです。

こうした中で、私達建築家がどこまでそれを理解して設計しているかは大切なことです。再利用の提案、将来の模様替えに備えた構造の提案、理想的には1日でも長く愛され使われる建築を目指して設計する必要を一層感じている今日この頃です。



建築防水について

国定 達雄

(株)ダイフレックス 新潟営業所

現在の業界を取り巻く環境は、建築不況の中大変厳しい状態であります。改修工事の拡大という市場変化の折、改修工事に最適との評価を頂いているウレタン防水材は出荷量を伸ばしております。しかし、ウレタン防水が改修分野でのみ満足している訳ではありません。新築分野でも充分に評価され、採用実績拡大も我々にとって大きなテーマであります。幸いにして新築分野においても中央官庁等で相次いで採用され、また民間でもVE・LCCの視点からウレタン工法が評価されております。建築需要の期待できない市場展望の中で、CO₂発生量・建築産業廃棄物の低減等、厳しく環境対応が求められ、また、建築の長寿命化指向に伴う技術開発・LCCの低減など、課せられた課題は多くあります。

弊社もいち早くこれらの課題に対応すべく「バリューズ」シリーズを○○し、業界の変化に積極的に対処すべく努力致しております。

今後とも関係各位の皆様のご支援とご指導を衷心よりお願い申し上げる次第であります。



「愛と情熱の家づくり Vol. 2」にふれて

浜谷 明雄

(株)新和建材

激動の21世紀といわれる中、昨今の世界情勢や日本の政治・経済は益々混迷を極めているように思われます。我ら信州においても例外ではなく、より強く不景気の風が吹き荒れているように感じます。

その中で、今“癒し”という言葉をよく見聞きするようになりました。“癒し”という言葉に接した時、最初に「家族」を想うかべるのは私だけでしょうか。家族はかけがえのないもの。その家族にとって「家」が大切なのは言うまでもありません。

昨今の家の傾向は、プレハブ住宅やマンション志向が強いように思われます。健康・生活・環境・景観を考えた時、自然が豊富な信州においてその風土を生かした設計と材料が不可欠であると思います。

3月6日発行の「愛と情熱の家づくり」Vol. 2にふれさせて頂いた時、JIAの建築家の方々の“愛と情熱”を強く感じました。家づくりのパートナーとして益々知恵とワザを磨いて頂き、我々関係業者と技術交流を通じ共に進んでいければと願っております。

クラブインサイド

「愛と情熱の家づくり」VOL 2 編集経過報告会

関 邦 則

各自の原稿も揃い、編集作業も進行中だったが、2月5日に松本市のホテル飯田屋において経過報告会を開催した。本のタイトルは「信州の建築家とつくる家」とすることに決定。表紙のデザイン及び実践ガイドの内容や資料提出などについて慌しく討した。

事業委員会・会員委員会との合同会議 片 倉 隆 幸

2月12日第5回あすなろ建築展の準備について各会場の役割分担を確認する。第10回文化講演会については、当日にパネラーの打ち合わせの確認と各メディアにPRの確認をする。

選定議員会

関 邦 則

役員の改選を行う年になり、まず選定議員選出投票を前回同様FAXによって実施した。9名が選出され、2月18日に松本市のホテル飯田屋で選定議員会を開催したところ、現役員全員の留任が決定した。

第10回文化講演会

片 倉 隆 幸

作家、藤原智美氏の基調講演の後、コーディネーターにプレジデント社の原さんを迎える。藤原氏とオフィスエムの寺島さん、JIAから片倉と住まいと家族関係を考える「家をつくる方へのメッセージ」という内容で議論をする。藤原氏は、夫婦関係の大切さを強調。建築家は、家づくりのカウンセラーであるべきだと言葉を残した。

JIAあすなろ建築展

荻 原 白

あすなろ建築展が今年も3月5日より31日まで長野→飯田→上田→松本のコースで開催。「愛と情熱の家づくりvol.2」の紹介販売と賛助会員コーナーも併設。今回は学生の作品展示は実施せずJIAメンバー17社の作品展示となつた。次回も多数の作品をお待ちしています。

クラブアウトサイド

第10回支部教育委員会

市 川 英 一

1月30日開催。本年度の事業のまとめと来年度の活動方針について審議。CPDプロバイダー登録を継続しCPD認定プログラムを提供することとし、詳細は次回以降の委員会で検討していく。

第11回支部保存問題委員会 依 田 政 司

2月1日開催。栃木大会の最終打ち合わせ。同潤会大塚女子アパートと高崎にある井上邸に関する保存要望書について検討。その他の保存問題についての報告もあり、それについて協議した。

第4回地域サミット

松 下 重 雄

2月24日、日光金谷ホテルで開催。千葉地域会の組織改定問題が報告され千葉設置を解散し、JIA千葉と合体する際の諸問題について活発に討議された。支部財務は厳しく、地域活動費の削減が予想される。長野・群馬・新潟の学生卒業設計コンクール合同取組みを報告。

第122回本部理事会

出 泽 潔

2月28日開催。報告事項13、審議事項10、協議事項3、会員増強の件、CPD実施に伴う諸問題、JIA基本政策会議での「中・長期的に見たJIAのあるべき姿」の報告書の概要報告などに加えて、大宇根次期会長より「次年度事業計画の骨子」の説明があり意見交換。詳細はJIANEWS参照。

群馬県「学生卒業設計コンクール」審査会

小宮山 直 樹

今年より長野・群馬・新潟の3県合同で各審査にオブザーバー参加することとなり、初回の群馬での審査会に参加しました。群馬の皆様を中心として審査は進められ学生らしい「夢」のある作品が選出されました。

第6回支部役員会

松 下 重 雄

3月20日、日本青年館にて支部交流大会と併催で行われた。支部・本部関連の動きについての報告事項に続き議事としてギャラリー「間」の後援依頼、決算見込み報告(150万円程の赤字)、委員会規定の改正案が諮られ承認された。名誉会員候補に宮本忠長氏が推薦された。

第14回支部交流大会(賛助会員大会) 坂 田 守 夫

3月20日、日本青年館で開催。第1部の交流大会に高橋交流委員長と出席。各県代表のディスカッションの予定だったが、東京、埼玉、長野のみの出席となつたため、高橋交流委員長と私が長野県の賛助会の現状について述べさせて頂いた。記念講演会、懇親会も開催された。

地域材利用にかかる情報交換会

松 下 重 雄

3月13日、塩尻市の長野県林業総合センターで長野県木造住宅協会、県林務部関係者と当会有志10名にて行われた。センターの見学に続き、山側と住宅を設計する立場の私達とで標題について活発な意見交換がされた。



JIA長野県クラブ

編集人 依田政司
発行人 松下重雄
発行所 JIA長野県クラブ
長野市南長野妻科
426-1
長野県建築士会館内
TEL 026(232)3897
FAX 026(232)5303
作成 新建新聞社

皆様からの投稿をお待ちしております。誌面へのご意見もお寄せ下さい。